

日本語学習者の中間言語 — 韓国人日本語学習者による統語的複合動詞の習得の観点から —

木戸 康人・團迫 雅彦・一瀬 陽子

抄録

外国語学習者は母語でも目標言語でもない中間言語の文法を有する。日本語学習者がどのような中間言語を有しているのかを明らかにすることは第二言語習得研究において重要な研究課題の1つである。本稿の目的は、日本語学習者の中間言語を統語的複合動詞の観点から解明することである。韓国人日本語学習者を調査した結果、習熟度テストで分けられた上位群と下位群ともに母語からの転移が観察された。しかし、母語からの転移では説明できない日本語学習者に特有な現象も観察された。具体的には、進行相（と起動相）が完了相よりも容認度が高いことと統語的複合動詞の後項動詞の自他を誤用することが明らかになった。

1. はじめに

本稿の目的は、各々の韓国人日本語学習者が有する中間言語（interlanguage）を統語的複合動詞の観点から解明することである。特に、韓国人日本語学習者による統語的複合動詞の習得には順序があること、また、母語からの転移としてV1を名詞化することや副詞表現を使うことにより複合動詞を回避する傾向があることを報告する。さらに、それとは独立して、日本語学習者全般に見られる現象として、進行相と起動相の容認度が完了相よりも高いこと、統語的複合動詞のV2の自他を誤用することがあることを指摘する。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、日本語の統語的複合動詞に関する理論研究と第二言語習得研究について概観する。第3節では、実施した調査について報告し考察する。第4節では、結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究

2.1 日本語の複合動詞と韓国語の複合動詞

日本語には形態的には二つの動詞が連続した複合動詞が存在するが、その内部構造は2つに大別されると指摘されている（影山 1993, Saito 2013）。

直訳：太郎が弁当を食べることを忘れた。

- b. *Taro-ka tosilak-ul {mek-ki / mek-e} ic-ess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc {eat-suffix / eat-affix} forget-Past-Decl

(4a) は日本語において V2 が「忘れる」の複合動詞 (e.g., 食べ忘れる) は韓国語では複合動詞の形式ではなく、VP1 を名詞化させた「먹는것을 잊었다 (直訳：食べることを忘れた)」という形式で表すことを示し、(4b) は複合動詞の形式で表すと非文になることを示している。また、(5) に示すように、V2 が「始める」のときも VP1 を名詞化させた形式で表す。

- (5) a. Taro-ka tosilak-ul mek-ki sicakh-ess-ta.⁶
 T-Nom lunchbox-Acc eat-suffix start-Past-Decl
 直訳：太郎が弁当を食べること始めた。
 b. *Taro-ka tosilak-ul mek-ki-lul sicakh-ess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc eat-suffix-Acc start-Past-Decl
 c. Taro-ka tosilak-ul mek-nun-kes-ul sicakh-ess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc eat-Rel-NMNZ-Acc start-Past-Decl

(5a) では、日本語複合動詞における V1 に相当する *mek-* (ie., 食べ-) に動名詞化接尾辞 *-ki* が付き、その動名詞化された *mek-ki* (直訳：食べること) を *sicakhessta* (直訳：始めた) が補部を取っている (Kido, Dansako and Isse 2015)。ただし、(5b) に示すように、*-lul* (「を」格) を付与すると容認されず、韓国語で「食べることを始める」という場合には (5c) のように表現する。その点で、「始める」は「忘れる」と同じタイプに属している。

次に、韓国語において複合動詞の形が容認されない代わりに、VP1 の名詞化ないし別の表現として副詞を用いて表現するタイプを見てみよう。

- (6) a. Taro-ka tosilak-ul mek-nun-kes-ul kkeutn-aess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc eat-Rel-NMNZ-Acc finish-Past-Decl
 直訳：太郎が弁当を食べることを終えた。

- b. Taro-ka tosilak-ul ta mek-ess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc all eat-Past-Decl
 直訳：太郎が弁当を全て食べた。
- c. *Taro-ka tosilak-ul {mek-ki / mek-e} kkeutn-aess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc {eat-suffix / eat-affix} finish-Past-Decl

- (7) a. Taro-ka tosilak-ul mek-nun-kes-ul kyeysoxh-ess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc eat-Rel-NMNZ-Acc continue-Past-Decl
 直訳：太郎が弁当を食べることを続けた。
- b. Taro-ka tosilak-ul kyeysox mek-ess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc successively eat-Past-Decl
 直訳：太郎が弁当を続けて食べた。
- c. *Taro-ka tosilak-ul {mek-ki / mek-e} kyeysoxh-ess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc {eat-suffix / eat-affix} continue-Past-Decl

(6a) と (7a) は、日本語の統語的複合動詞における V1 を名詞化させた表現が韓国語において容認できること、(6b) と (7b) は V2 が表す完了相と進行相を韓国語では「다 (全て)」や「계속 (続けて)」で表し、それらが、副詞のような役割を担うことで日本語の統語的複合動詞と類似した意味を迂言的に表すことを示している。また、(6c) と (7c) は複合動詞の形式で表すと非文になることを示している。

最後に、韓国語において複合動詞の形と VP1 の名詞化が容認されないため副詞を用いて表現するタイプを見てみよう。

- (8) a. *Taro-ka tosilak-ul mek-nun-kes-ul kkeutn-ass-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc eat-Rel-NMNZ-Acc finish-Past-Decl
 直訳：太郎が弁当を食べることを終わった。
- b. Taro-ka tosilak-ul ta mek-ess-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc all eat-Past-Decl
 直訳：太郎が弁当を全て食べた。
- c. *Taro-ka tosilak-ul {mek-ki / mek-e} kkeutn-ass-ta.
 T-Nom lunchbox-Acc {eat-suffix / eat-affix} finish-Past-Decl

(8a) は韓国語では容認されない。日本語の場合、「終わる」は「を」格も取れる (e.g.,

これで私の発表を終わります) ため非文ではないが、韓国語では、「弁当を食べることを終わった」はあまり容認されない。⁷ 一方、(8b) のように副詞「다 (全て)」を用いると日本語の「食べ終わる」と近似の意味を表すことができる。また、(8c) は複合動詞の形式で表すと非文になることを示している。

まとめると、日本語複合動詞は内部構造の違いにより語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二つに下位分類される。日本語において V2 がアスペクトを表す統語的複合動詞を用いた文の意味内容を韓国語では複合動詞を用いて表現できない。その代わりに、VP1 を名詞化させたり副詞表現を用いたりする。

2. 2 中間言語と転移

第二言語習得研究では学習者がもつ中間言語がどのようなものなのかという問いが重要な研究課題の1つである (Selinker 1972)。中間言語は母語とも目標言語とも異なる体系をなし、常に母語と目標言語の間にあるものと考えられ、学習者1人ひとり異なる中間言語体系を持つ。また、VanPatten (1996: 14-15) によると、学習者が得たインプットの中で処理するものには順序があり、形式よりも意味を先に処理し、発話や文を理解する上で意味のある (meaningful) 語をあまり意味のない (less or nonmeaningful) ものよりも処理するのを好む。例えば、日本人英語学習者が三人称単数の -s を習得するのが難しいことが報告されている (Yoshimura and Nakayama 2009) が、ここで報告されたことを VanPatten (1996) による一般化の観点から述べると、三人称単数の -s が文処理上意味のない要素であるためだと説明できる。

中間言語は概して自然言語一般に関係する普遍的な制約と学習者の母語の影響により形成されている。母語の影響は主に転移 (transfer) と呼ばれ、Odlin (1989: 27) はすでに身につけた言語と目標言語との間の類似点および相違点から生じる影響だと定義している。転移には正の転移と負の転移がある。前者は母語の知識を目標言語の学習に直接応用しても問題ない転移である。一方、負の転移は母語の知識を目標言語に応用すると間違った用法になる転移である。転移が起こる要因の1つは学習者が目標言語の文法や語彙力に自信がない場合、それを使わないように回避 (avoidance) することであると考えられている (cf. Schachter 1974)。実際、松田 (2002: 44) と陳 (2004: 60) は、日本語学習者が複合動詞を習得する際、複合動詞を使わなくても単純動詞のみで意味が通じることが多いため複合動詞を使用することを避ける傾向にあることを報告している。転移に関する研究は80年代以降、母語からの転移だけでなく普遍的な制約も関係している可能性があることが注目され始め、現在では、普遍的な制約とは何かを明らかにすることが重要な研究課題の1つになっている。しかし、現時点では基準が研究者の中で一致しておらず、その

普遍的な制約が何なのかは明らかになっていない (Jarvis and Pavlenko 2008)。

2. 3 日本語学習者によるアスペクトと統語的複合動詞の習得研究

日本語のアスペクトの習得研究としては主に「ている」の習得研究が行われている。日本語の「ている」は進行相と完了相を表す (金田一 1950)。⁸ その事実を基に、許 (2005) は中国人日本語学習者を、Sugaya and Shirai (2007) は英語、ドイツ語、ロシア語、ウクライナ語、ブルガリア語を母語とする日本語学習者を対象に調査を行った。その結果、母語に関係なく進行相の「ている」の方が完了相のそれよりも正答率が高いことが明らかになっている。⁹

しかし、日本語においてアスペクトを表すのは「ている」だけではない。日本語には統語的複合動詞があり、V1に「始める／出す／かける」(起動相)、「続ける」(進行相)、「終わる／終わる」(完了相)を付け加えることによってV1が表す事象にアスペクトを付け足すことができる。¹⁰ 2.1節で概説したような日本語と韓国語における複合動詞の語形成の差異を基に、韓国人日本語学習者がどのように日本語複合動詞を習得するのかという問題を明らかにしようとする研究が行われている。例えば、白 (2012) は、日本語の「出す」には「開始」を表す意味があるが、韓国語の「내다 (直訳：出す)」には「開始」の意味がないことに着目し、学習者の母語 (韓国語) にはない「開始」の用法の習得はほかの用法より遅れるとする仮説を立て、その仮説が妥当であると提案している。具体的には、韓国人日本語学習者は「突然電話が鳴り出した」という文を「電話が鳴って音が出た」という「出現」の意味で捉えるはずであるとする予測が妥当かどうかを検証している。その結果、「突然電話が鳴り出した」を正しいと判断した学習者であっても、翻訳テストでその例文の意味を韓国語で訳させると、学習者はV2「出す」を予測通り本動詞の意味で訳し、「開始」の意味で訳さなかった。このことから、韓国人日本語学習者は、文法性判断テストにおいて例文を正しく判断したとしても、実際には、日本語の「出す」が持つ「開始」の用法を習得していないと白 (2012) は主張している。

さらに、陳 (2010) は、中国、韓国、インドネシアなどのアジア 10 カ国の国の出身の日本語学習者が使用した複合動詞を作文データコーパスの中から抽出して分析している。陳 (2010) は、(9) に示すように、統語的複合動詞のV2が他動詞である場合、日本語学習者がそれを自動詞で表現することを観察している。

- (9) a. たばこを吸い始めります。
 b. ふたたび笑いはじりました。
 c. とびつづいていました。 (インド人日本語学習者：陳 2010: 29)

さらに、一瀬・木戸・團迫（2015）は複合動詞に関する理論研究を基に、様々な統語的複合動詞の V2 を調査項目に取り入れ、韓国人日本語学習者の場合、どのような母語からの転移が観察されるかを調査している。32 名の学習者（上位群 17 名、下位群 15 名）を対象にしてクローズテストを実施した結果、下位群の被験者 1 名が「ケーキを続けて食べた」というように（7b）に示した韓国語を直訳した形式と同じ形式を回答したことから、母語からの転移が観察されたと報告している。

3. 調査

2 節で概説した先行研究の研究成果より、本研究では（10）に示す研究課題に取り組む。

- (10) a. 「ている」とは関係なく、進行相の方が完了相よりも正答率が高いのか。
b. 韓国人日本語学習者の産出課題や理解課題において、負の転移（VP1 を名詞化させたり、副詞を使用したりする傾向）が観察されるのか。
c. 韓国語日本語学習者において統語的複合動詞の V2 の自他の誤用が観察されるのか。

（10a）を調査する理由は、2.3 節で説明したように、許（2005）と Sugaya and Shirai（2007）が調査した日本語学習者は進行相を表す「ている」の方が完了相を表すそれよりも正答率が高かった。この研究結果が日本語学習者の有する中間言語に普遍的な特性を示しているのであれば、V2 が進行中の事象を描写する「続く／続ける」の複合動詞と事象が終結したことを描写する V2 が「終わる／終える」の場合、前者の方が後者よりも正答率が高いはずであるからである。次に、（10b）を検討する理由は、2.3 節で紹介した一瀬・木戸・團迫（2015）の研究結果で「ケーキを続けて食べた」というように母語からの負の転移が観察されていたが、被験者が 1 名のみであったからである。もし「続けて食べた」のような母語からの負の転移が本調査での韓国人日本語学習者にも観察されるのであれば、「続けて食べた」のような副詞を使用したものだけでなく VP1 を名詞化させたものも観察されると予測される。この予測が正しいかどうか検討する。最後に、（10c）の課題に取り組む理由は、2.3 節で述べたように、陳（2010）が調査したインド人日本語学習者が V2 の自他を誤用していることが報告されたが、それが学習者の母語に関係なく日本語学習者全般に観察されることなのかどうかを調べるためである。もし韓国人日本語学習者にも観察されるのであれば、V2 の自他を誤用するのは母語からの転移ではなく日本語学習者が有する中間言語に特有のものであると考えられる。

3. 1 被験者

東京都にある専門学校に在籍する韓国語を母語とする日本語学習者 48 名を対象とした。また、統制群として、日本の大学に通う 19 歳から 20 歳の日本人 24 名に同じ調査を実施した。まず習熟度テストの結果を基に、韓国語母語話者をそれぞれ上位群と下位群に分けた ($p < .001$)。

表 1. 習熟度テストの結果

群	平均	標準偏差
上位 (n = 23)	19.9	1.1
下位 (n = 25)	15.0	3.0

学習者の年齢と日本語の学習期間と日本滞在期間のそれぞれの平均値は表 2 である。

表 2. 学習者の年齢と学習期間と日本滞在期間等の平均値¹¹

群	年齢 (歳)	日本語学習期間 (ヶ月)	日本滞在期間 (ヶ月)
上位 (n = 23)	22.9	49.3	15.3
下位 (n = 25)	25.0	84.0	21.9

3. 2 調査項目

3. 2. 1 自他の区別に関するテスト

本実験を行う前に「自他の区別に関するテスト」も実施した。「複合動詞を正しく作り出し、文を完成させられるか」という問いに答えられるかどうかは次に示す 2 つの前提の上に成り立っている議論だからである。第一に、複合動詞の自他の区別に関する議論よりも前に、単純動詞の自動詞と他動詞の区別ができているかどうかという点である。第二に、格助詞と自動詞ないし他動詞を正しく組み合わせられるかどうかという点である。本調査における被験者が自他の区別を理解しているかどうかを調べるために、(11) に示すように、a. と b. のうちどちらが日本語として正しいかを選ばせる課題を実施した。

(11) a. ヨンヒが英語の勉強^{えいご べんきょう つづ}を続いた。 / b. ヨンヒが英語の勉強^{えいご べんきょう つづ}を続けた。

もし産出データにおいて日本語として不自然なデータが観察された場合に 2 つの前提を明確にしておかなければ、それが何に起因するのかが分からない。

3. 2. 2 産出テスト

本調査において使用した産出テストは (12) である。

(12) 3つの動詞から2つ選び、適切な形に直しなさい。¹²

続ける^{つづ}／食べる^た／続く^{つづ} → 私はお菓子を(わたし か し) ()。

この課題では、複合動詞を作るために、V1を連用形に活用すること、さらに、V2としての候補に自動詞と他動詞があった場合、どちらが日本語として適切かどうかを判断することが被験者に求められている。

3. 2. 3 文法性判断タスク

文法性判断タスクでは、4段階の順序尺度(完全に間違っている／たぶん間違っている／たぶん正しい／完全に正しい)を用いた。被験者に提示する際には、例文と錯乱肢をランダムシャッフルして、それぞれの文がどの程度正しいかを判断させた。なお、本調査では、被験者に判断させるのをV2に集中させるために、V1を「食べる」に統一した。¹³ 文法性判断タスクで使用した調査項目は(13)から(17)に示す5つである。例えば、(13)の「韓国語においてVP1の名詞化可能」とは、韓国語において、日本語複合動詞のV2が「忘れる」と「飽きる」のものをVP1を名詞化することで迂言的に表現するタイプのことである。つまり、韓国語においては(13a)を韓国語にした文は容認されるが、(13b)を韓国語にした文は容認されないことを意味している。

(13) 韓国語においてVP1の名詞化可能：

(例)「忘れる」、「飽きる」

- a. ヨンヒが弁当を食べることを忘れた。 (名詞化) (表3：①)
 b. ヨンヒが弁当を食べ忘れた。 (複合動詞) (表3：②)

(14) 韓国語においてVP1の名詞化可能および副詞表現可能：

(例)「終える」、「続ける」

- a. キムは毎朝ヨーグルトを食べることを続けた。 (名詞化) (表3：③)
 b. キムは毎朝ヨーグルトを食べ続けた。 (複合動詞) (表3：④)
 c. キムは毎朝ヨーグルトを続けて食べた。 (副詞表現) (表3：⑤)

(15) 韓国語において VP1 の名詞化不可能だが副詞表現可能：

(例)「終わる」

- a. キムは毎朝ヨーグルトを食べることを終わった。(名詞化) (表3：⑥)
- b. キムは毎朝ヨーグルトを食べ終わった。(複合動詞) (表3：⑦)
- c. キムは毎朝ヨーグルトを全部食べた。(副詞表現) (表3：⑧)

(16) 日本語において V2 が本来の意味無し：

(例)「出す」、「かける」

- a. ヨンヒは弁当を食べることをかけた。(名詞化) (表3：⑨)
- b. ヨンヒは弁当を食べかけた。(複合動詞) (表3：⑩)

(17) 日本語において V2 が本来の意味有り：

(例)「続く」「始まる」

- a. キムはヨーグルトを食べることを続いた。(名詞化) (表3：⑪)
- b. キムはヨーグルトを食べ続いた。(複合動詞) (表3：⑫)

(13) から (17) に示した例の右側に示している①から⑫までの数字は、表3における①から⑫と対応している。例えば、(13a) の例の場合は右側に「表3：①」と記されているため、表3において①の箇所注目する。すると、「日○／韓○」と書いてある。これは(13a) の例文が日本語においても韓国語においても V1 の名詞化が可能であることを示している。また、「韓○」に網掛けがされているのは、その列の名前が「韓国語 V1 名詞化可能」と書いてあるように、特に韓国語において V1 の名詞化が可能かどうか注目して欲しいことを意図しており、「韓国語 V1 名詞化可能」と合致しているところに網掛けをしている。これを表で表すと次のようになる。

表3. 容認可能性に関する分類

	韓国語 V1 名詞化可能	韓国語 V1 名詞化可能 および副詞表現可能	韓国語 V1 名詞化不可能 および副詞表現可能	日本語 V2 本来の意味無し	日本語 V2 本来の意味有り
名詞化	①日○／韓○	③日○／韓○	⑥日△／韓×	⑨日×／韓×	⑪日×／韓×
複合動詞	②日○／韓×	④日○／韓×	⑦日○／韓×	⑩日○／韓×	⑫日×／韓×
副詞表現		⑤日○／韓○	⑧日○／韓○		

もし韓国人日本語学習者に正の転移が起こるのであれば、①と③では上位群と下位群ともに名詞化を好み、⑤と⑧では副詞表現を好むが、⑨と⑪では名詞化を好まないはずである。一方、複合動詞に関しては、どの組み合わせが日本語複合動詞として良くどの組み合わせが悪いのかは日本語の能力次第である。したがって、②と④と⑦と⑩は上位群は容認すると答えるが、下位群は母語に対応する形がないため、負の転移により容認しないと答えると予測される。それに対して、⑫に関しては上位群が日本語に関する知識を日本語母語話者と同程度習得していると仮定すると、(17b) のような V2 が本来の意味を有している複合動詞を正しく容認しないと答えるが、下位群は日本語母語話者と同程度の日本語の知識を有していないだけでなく韓国語の知識に頼りながら日本語を習得していると仮定すると、母語に対応する形がないため、正の転移により容認しないと答えるはずである。

3. 3 結果と考察

3. 3. 1 自他の区別に関するテスト

まず自他の区別に関するテストを行った調査結果を報告する。結果が表4と表5である。

表4. 自他の区別に関するテストの結果

群	誤答回答者数	延べ誤答数
上位 (n = 23)	1 / 23 (4%)	2 / 138 (1%)
下位 (n = 25)	14 / 25 (56%)	33 / 150 (22%)

表5. 自他の区別テストの結果 (正答率)

	上位群 (n = 23)	下位群 (n = 25)
1. 勉強を (続いた / 続けた)。	22 (95.7%)	15 (60.0%)
2. 勉強が (続いた / 続けた)。	23 (100%)	16 (64.0%)
3. 勉強を (始めた / 始まった)。	22 (95.7%)	20 (80.0%)
4. 授業が (始めた / 始まった)。	23 (100%)	21 (84.0%)
5. 勉強を (終えた / 終わった)。	23 (100%)	24 (96.0%) ¹⁴
6. 授業が (終えた / 終わった)。	23 (100%)	21 (84.0%)

上位群は1人を除いて22人が全問正解した。一方、下位群では、25人中14人が少なくとも1問以上を誤答し、その誤答数の合計が33問であった。誤答をした上位群の1名は表5の1.と3.を間違えており、下位群は約3割が自他を誤用していることが分かった。

3. 3. 2 産出テスト

次に、産出テストの結果が表6と表7である。

表6. 産出テストの結果

群	誤答回答者数	延べ誤答数
上位 (n = 23)	21 / 23 (91.3%)	31 / 138 (22.4%)
下位 (n = 25)	24 / 25 (96.0%)	83 / 150 (55.3%)

表7. 産出テストの結果 (正答率)

	上位群 (n=23)	下位群 (n=25)
1. 私はお菓子を (食べ続けた)。	21 (91.3%)	8 (32.0%)
2. 雨が (降り続いた)。	18 (78.2%)	6 (24.0%)
3. 私は先に夕食を (食べ始めた)。	21 (91.3%)	13 (52.0%)
4. 雨が (降り始めた)。	6 (26.1%)	6 (24.0%)
5. 私は朝食を (食べ終えた/食べ終わった) ¹⁵	22 (95.6%)	16 (64.0%)
6. 雨が (降り終わった)。	19 (82.6%)	18 (72.0%)

表6より、上位群でさえ、全問正解しているのが2名のみであり、下位群の場合は、1名のみであることが分かる。また、誤答数に関しては上位群の方が下位群よりも割合が小さいが、上位群と下位群ともにV2の自他を間違えている。さらに、2つの動詞を組み合わせて複合動詞を作れるかどうかに関しては、下位群の中には「食べ続いた」や「食べ始まった」のようにV2の自他を間違えている学習者が18名いた。それだけでなく、複合動詞を作るときに「食べり始まる」や「降る始まる」のようにV1を正しく連用形にできていない下位群の学習者が10名いた。なお、連用形の誤用は上位群ではまったく確認されなかった。

さらに、上位群に関しては、自他の区別テストで間違えていた1名の学習者が、産出テストにおいて下位群と同様に「続けて食べた」「食べ始まった」「降り始まった」と回答していた。一方、下位群では「食べ続ける」ではなく「続けて食べる」「続いて食べる」「続けて降る」のように、(7b)に例示した韓国語(母語)の影響と考えられる語順の回答が目立った。¹⁶例えば、下位群において「続けて食べた」「続けて降った」との回答が合計14個あった。

興味深いことに、「続けて食べた」「続けて降った」の両方を回答した者が4名いた。そのうち、3名は自他の区別テストで満点を取っていた。また、上位群で自他の区別テスト

を間違えなかった学習者であっても、「続いて降った」というように母語からの転移が観察された。このことから、韓国人日本語学習者にとって動詞の自他の習得と母語からの転移は独立した問題である可能性がある。この考察は、陳（2010）により調査されたインド人日本語学習者でも日本語学習者がV2の自他を誤用することが観察されたことに鑑みると、(10c)で示した研究課題に対して、複合動詞のV2の自他を間違えるのは学習者の母語に関係なく日本語学習者の中間言語において広く観察されるものの1つだと帰結できる。¹⁷

それから、下位群において「続けて～」と回答した学習者のうち5名は「始め(て)食べた」や「終え(て)食べた」とも回答しており、その関係は真部分集合であった。韓国語で日本語の統語的複合動詞が表す意味を言い表すためには、(6b)、(7b)、(8b)に示したように、「副詞+動詞」の形で言い表さなくてはならないことが関係していると推測される。この観察より、(10b)の研究課題に対して、韓国人日本語学習者は産出課題において、下位群は副詞を使用する傾向が観察されたと一部回答できる。

3. 3. 3 文法性判断タスク

最後に、文法性判断タスクの調査について報告する。分析方法は、4段階の尺度を、それぞれの間の差が2になるように、-3, -1, +1, +3と数値化した。さらに、(13)から(17)に示したように、韓国語においてVP1の名詞化が可能かどうか、および、日本語においてV2が本来の意味を有するかどうかで、動詞の特性を5つに分類した。まず初めに、調査に使用した個々の動詞の容認度を群ごとに平均値を示す。図1は視覚的に判断しやすいように棒グラフで平均値を示したのに対して、表8は図1において示されている実際の平均値を示したものである。+3に近ければ容認されることを示し、-3に近ければ容認されないことを示している。

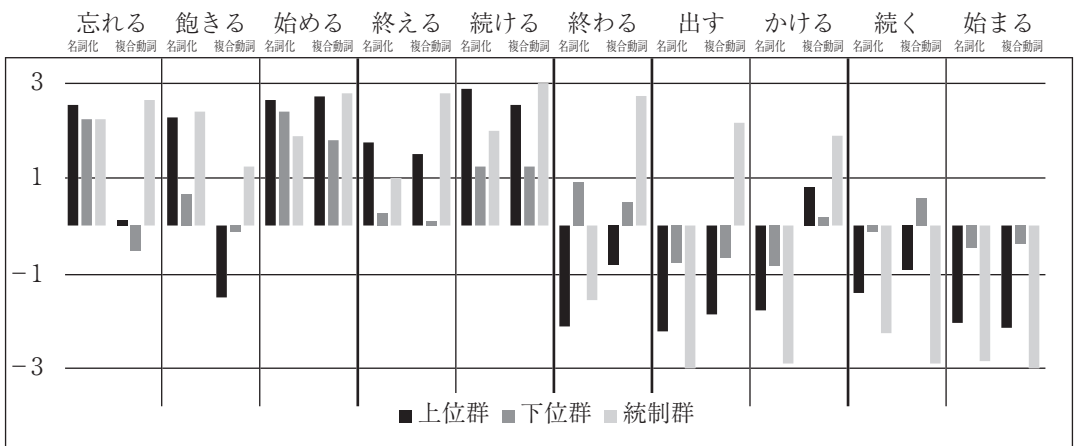


図1. 調査に使用された動詞の容認度

表 8. 調査に使用された動詞の容認度

V2	韓国語において VP1 の名詞化可能						日本語において V2 が本来の意味無し			
	忘れる		飽きる		始める		出す		かける	
	名詞化	複合動詞	名詞化	複合動詞	名詞化	複合動詞	名詞化	複合動詞	名詞化	複合動詞
上位群	2.57	0.13	2.30	-1.52	2.65	2.74	-2.22	-1.87	-1.78	0.83
下位群	2.25	-0.52	0.68	-0.12	2.44	1.80	-0.76	-0.68	-0.84	0.20
統制群	2.25	2.67	2.42	1.25	1.92	2.83	-3.00	2.17	-2.92	1.92

V2	韓国語において VP1 の名詞化可能 および副詞表現可能				韓国語において VP1 の 名詞化不可能 および副詞表現可能		日本語において V2 が本来の意味有り			
	終わる		続ける		終わる		続く		始まる	
	名詞化	複合動詞	名詞化	複合動詞	名詞化	複合動詞	名詞化	複合動詞	名詞化	複合動詞
上位群	1.78	1.52	2.91	2.57	-2.13	-0.83	-1.43	-0.91	-2.04	-2.13
下位群	0.28	0.12	1.24	1.24	0.92	0.52	-0.12	0.60	-0.44	-0.36
統制群	1.00	2.83	2.00	3.00	-1.58	2.75	-2.25	-2.92	-2.83	-3.00

図 2 と表 9 は名詞化、図 3 と表 10 は複合動詞の結果である。表 9 の数値が図 2 に、表 10 の数値が図 3 に棒グラフで示されている。

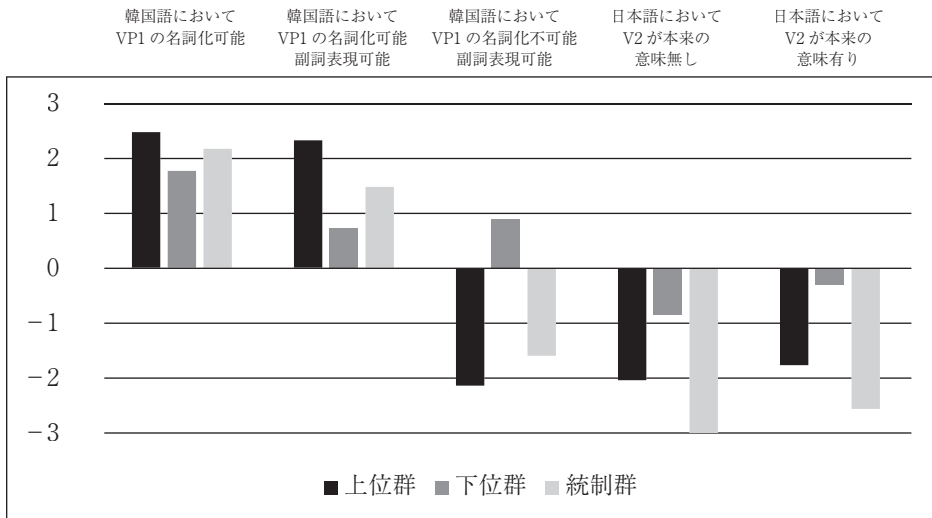


図 2：文法性判断タスクの平均値（名詞化）

表 9. 文法性判断タスクの平均値（名詞化）

分類	名詞化可能	名詞化可能 副詞表現可能	名詞化不可能 副詞表現可能	本来の 意味無し	本来の 意味有り
上位群	2.51	2.35	-2.13	-2.00	-1.74
下位群	1.79	0.76	0.92	-0.80	-0.28
統制群	2.20	1.50	-1.58	-2.96	-2.54

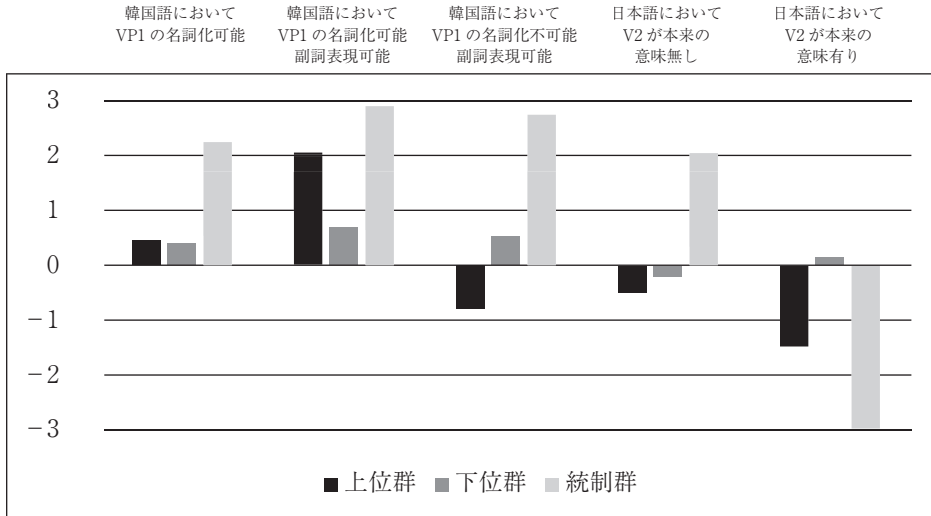


図 3：文法性判断タスクの平均値（複合動詞）

表 10. 文法性判断タスクの平均値（複合動詞）

	名詞化可能	名詞化可能 副詞表現可能	名詞化不可能 副詞表現可能	本来の 意味無し	本来の 意味有り
上位群	0.45	2.05	-0.83	-0.52	-1.52
下位群	0.39	0.68	0.52	-0.24	0.12
統制群	2.25	2.92	2.75	2.05	-2.96

3. 4 全体考察

図 2 と図 3 と表 9 と表 10 より、統制群は名詞化よりも複合動詞を高く容認するのに対して、上位群と下位群ともに複合動詞をあまり容認せず名詞化を容認する傾向があることが分かる。特に上位群は「韓国語において VP1 の名詞化可能」に分類されるものや「日本語において V2 が本来の意味無し」に分類されるものは日本語において複合動詞が可能

であるにもかかわらず、容認しないと判断していることが図3と表10から分かる。これは韓国語ではV1を名詞化して表すことが影響していると考えられる。このことから、(10b)に示した研究課題に対して、韓国人日本語学習者はVP1の名詞化を好む傾向があると見えそうである。

図1と表8より、韓国人日本語学習者は日本語複合動詞を習得する際、アスペクトを表すV2(終える、続ける、始める、かける)、すなわち、V1を構成する動詞句にアスペクトを付け加えることで作られる複合動詞の容認度が高い。この事実はV2がアスペクト動詞の複合動詞を早い段階で習得していることが示唆される。なかでも、V2が「始める」と「続ける」と「終える」の複合動詞は上位群と下位群ともに正しいと回答しているが、「終える」の容認度は他の2つよりも高くない。このことから、(10a)の研究課題に対して、韓国人日本語学習者は進行相(「続ける」)(と起動相(「始める」))の方が完了相(「終える」)よりも容認されると考えられる。¹⁹この結果は、日本語学習者がアスペクトを習得する際、進行相の方が完了相よりも正答率が良いとする「ている」を用いた許(2005)とSugaya and Shirai(2007)の研究結果とも合致する。重要なのは、本研究の帰結は「ている」「続ける」「終える」という形式は関係なく、それが表す意味、すなわち、進行相と完了相が習得に大きく関係していることを示していることである。その点において、進行相の方が完了相よりも正答率が良いことは日本語学習者が持つ中間言語全般に見られる現象の1つである可能性がある。²⁰

実際、図1と表8に示すように、心理動詞(「忘れる」「飽きる」)の場合には上位群と下位群ともに複合動詞を容認できないと判断しているのに対して、アスペクト動詞(「始める」「終える」「続ける」「かける」)の場合には複合動詞が容認される。この結果は心理動詞とアスペクト動詞の違いが自他交替の有無によることを示唆している。ただし、V2が「終わる」の複合動詞の場合には上位群では-0.83と容認されないと見なされるのに対して、下位群では0.52と容認されると見なされている。この結果は、上位群において、「続ける／続く」が自他交替の点で対応し、「食べ続く」が日本語の語彙の特性により容認されないが、「終える／終わる」も同様に自他交替という点で対応しているため、「食べ終わる」も容認されないと過剰般化した可能性がある。また、「かける」は、上位群と下位群ともに統制群と同じ傾向を示していたのに対して、V2が本来の意味でない「出す」の複合動詞の場合には、上位群と下位群ともに韓国人日本語学習者は容認できないと判断していた。この結果は、白(2012)の研究結果と同様に、「出す」を本動詞と見なしている可能性がある。

さらに、V2の自他について考察すると、上位群は「食べ続ける」を容認でき「食べ続く」は容認できないと正しく判断しているが、下位群の場合、回答に一貫性がなかった。

下位群は、(数値は低い)「食べ終える」だけでなく「食べ終わる」も容認できると判断し、さらに、「食べ続ける」だけでなく「食べ続く」も容認できると判断している。この結果は、韓国人日本語学習者(下位群)はV2の自他の区別ができていないと推測される。

以上の考察から、次のようにまとめられる。

- (18) a. 日本語学習者は、V2が語彙範疇の場合には名詞化を好む
(= VPを2つ連ねるのを回避する)。
b. 日本語学習者は、V2がアスペクト動詞の場合には複合動詞も容認する
(= VPは1つであり、そのVPにアスペクトの意味を付け加える)。

(18a)は韓国語においてVP1の名詞化が可能なタイプ、すなわち、V2が「忘れる」「飽きる」「始める」「終える」「続ける」の統語的複合動詞のことである。韓国人日本語学習者はVPを2つ連ねるのを回避するためにVP1を名詞化させたものであれば容認できると判断している可能性がある。この考察は、松田(2002: 44)と陳(2004: 60)が報告した日本語学習者が複合動詞を習得する際に示す回避現象と一致している。韓国人日本語学習者に限らず、一般的に、日本語学習者は複合動詞を使わなくても単純動詞のみで意味が通じる場合には複合動詞の使用を回避する、すなわち、VPを2つ連ねずVPを1つにするようである。ただし、V2が心理動詞(「忘れる」「飽きる」)の場合には複合動詞を容認しないのに対して、V2がアスペクト動詞(「始める」「終える」「続ける」「かける」)の場合には複合動詞も容認していた。このことを考慮すると、韓国人日本語学習者にとってはV2がアスペクトを表す動詞かどうか統語的複合動詞を作る際の重要な判断材料の1つである可能性がある。つまり、V2がアスペクト動詞の場合、VP1にアスペクトを付け加えていると考えられる。すなわち、VPはV1の最大投射であるVP1の1つであり、V2の最大投射はVPではなくAspect Phrase (AspP)であるということである。もしこの考察が正しいと仮定すると、V2がアスペクトの意味を持たない「忘れる」「飽きる」タイプの複合動詞を習得した学習者こそ、真に日本語の統語的複合動詞をすべて習得したと言える。このタイプは2つのVPが連なる統語構造だからである。この考察が正しいと仮定すると、韓国人日本語学習者の統語的複合動詞の習得には次の順序がある。

(19) 日本語学習者の統語的複合動詞の習得順序

第一段階：連用形の習得

第二段階：統語的複合動詞の習得

1. V2が本来の意味を持つアスペクト動詞の統語的複合動詞の習得
 - a. 起動相（「始める」／「始まる」、「かける」）
 - b. 進行相（「続ける」／「続く」）
 - c. 完了相（「終える」／「終わる」）
2. その他の統語的複合動詞の習得
 - a. V2が本来の意味を持つ心理動詞（「忘れる」「飽きる」）
 - b. V2が本来の意味を持たないアスペクト動詞（「出す」）

(19) は、統語的複合動詞を習得するためには、第一段階として、3.3.2 節の産出テストの結果で述べたように、連用形を習得する必要がある、続いて、第二段階として動詞の自他を習得する必要があることを示している。第二段階で示している「1.」と「2.」の下位分類は、韓国人日本語学習者は第二段階において、V2が本来の意味を持つアスペクト動詞の統語的複合動詞を習得する段階とその他の統語的複合動詞を習得する段階があることを意味している。また、アルファベット（a., b., c.）は「1.」ないし「2.」に該当する統語的複合動詞のなかでも習得順序があることを示している。例えば、「1.」では起動相と進行相を表すものの方が完了相を表すものよりも習得が早いことを表している。第二段階の「2.」を第三段階と明記しない理由は、必ずしも「1.」が習得された後に「2.」に移行するのではなく、「1.」に該当する統語的複合動詞を誤用しながらも「2.」に該当する心理動詞やアスペクト動詞「出す」を徐々に習得していくからである。なお、「1.」と「2.」の順番はこの通りであり、「2.」が「1.」よりも先に習得されることはない。²¹

もしこの習得順序が正しいと仮定すると、「食べ忘れる」「食べ飽きる」「食べ出す」と正しく回答できる学習者（すなわち、第二段階の「2.」に到達している学習者）は「VP にアスペクトを付け加えた複合動詞」および「動詞の自他」「V1 が連用形でなくてはならない」ことを習得しているはずである。しかし、「忘れる」「飽きる」タイプとアスペクト動詞「出す」を習得していると思わせる学習者は1人もいなかった。つまり、日本語母語話者はこれらのタイプの統語的複合動詞を判断する際、(1b) に示したように、VP を2つ連ねる構造を作るが、韓国人日本語学習者は上位群であってもVP は1つであり、それにアスペクト動詞を付け加えるか、もしくは、母語からの転移によりVP1 が名詞化したものをV2が取るようにしてVP を2つ連ねることをできるだけ回避していると考えら

れる。

加えて、(19) に示した習得順序があると考えさらなる証拠がある。文法性判断タスクにおいて「食べ忘れる」と「食べ飽きる」の容認度を「1」かつ「食べ出す」を「1」ないし「2」と評価した学習者（すなわち、第二段階の「2.」に到達していない学習者）は全員産出テストにおいてV1を正しく連用形にできていたが、V2の動詞の自他を間違えていた。つまり、第一段階と第二段階という段階があることを示唆している。さらに、V2が心理動詞「忘れる」「飽きる」の複合動詞の容認度とV2が「出す」の複合動詞の容認度を比べると、図1に示したように、「出す」の方が容認できないと回答している。一方、下位群の中には「食べ始める」を「食べり始まった」としたり、「降り始める」を「降って始まった」としたりするように、連用形を習得できておらず、また、日本語として正しい「食べ続ける」の容認度を「1」、「食べ忘れる」を「1」、「食べ飽きる」を「2」、「食べ続く」を「4」を記入しており動詞の自他を分かっていない学習者がいた。また、その次の段階として、下位群の中には、連用形は間違えない（すなわち、第一段階をクリアする）が、V2の自他を間違える（第二段階初期）という段階があることも確認された。

このように、韓国人日本語学習者が動詞の自他の習得が難しい要因は少なくとも3つあると考えられる。1つ目は意味のある語（meaningful word）なのかどうかという点である。具体的には、VanPatten（1996）による一般化を本研究に援用すると、V2がアスペクトを表す複合動詞の場合、V2の語幹を構成する「続」「始」「終」を見た時点で、これらがそれぞれ進行相、起動相、完了相の意味を有する動詞であることがわかるためV1にそれらの意味を補足することができる。そのため、V2が自動詞なのか他動詞なのかは意味処理する上で必要ない。すなわち、日本語学習者（少なくとも、下位群）はV2の自他を表す形態素（すなわち、形式）よりも漢字が表す意味を手掛かりにしている可能性がある。そのため、下位群では「続ける／続く」「始める／始まる」「終える／終わる」という自他の区別をできていなかったと推察される。2つ目は母語の影響である。韓国語では、例えば、「始める」と「続ける」は「漢語+する」の形（e.g., 시작한다（直訳：始作する）、계속한다（直訳：継続する））で表現されるため、自他交替（transitivity alternation）が起きない。そのため、自他交替の有無に影響されて、V2の自他の習得が難しい可能性がある。3つ目は統語的複合動詞のV2に使われる語彙の特性である。例えば、(i) 日本語複合動詞のV2には「始まる」が来ることがないことや(ii) V2の「終わる」は例外的に「を」格も取れること、(iii) 「続く」は統語的複合動詞のV2としては使えないこと²²、(iv) 「出す」や「かける」のように本動詞としての意味ではないV2が存在することである。

この考察を裏付ける根拠として、V2が本来の意味を持たないアスペクト動詞「出す」

の習得が最も遅いことを挙げられる。V2が「出す」の場合、図1に示したように、上位群と下位群ともに複合動詞を容認していなかった。これはV2が本動詞の意味ではないため習得が難しいと考えられる。この考察は、V2「出す」の意味を学習者が本動詞の意味で訳し、「開始」の意味で解釈していなかったと報告した白（2012）の研究結果とも合致する。²³

4. 結論と今後の課題

本論文では、日本語と言語的距離に近い韓国語を母語とする日本語学習者に対象を絞り、日本語学習者の中間言語の解明に取り組んだ。具体的には、統語的複合動詞の習得には連用形の習得（第一段階）、V2の自他の習得（第二段階）という順序があると提案した。また、韓国語日本語学習者には、母語からの転移としてV1を名詞化することや副詞表現を使って複合動詞を回避する傾向があると報告した。しかし、それとは独立に日本語学習者全般に共通する特性として、進行相（と起動相）が完了相よりも容認度が高いという一般的傾向があることがわかった。さらに、統語的複合動詞のV2の自他を誤用することも日本語学習者全般に見られる現象の1つである可能性を高めた。今後は、本稿で明らかにしたことが正しいことを補強するために、韓国語や先行研究で調査された言語以外の言語を母語とする学習者を対象にして日本語学習者の中間言語を解明していく必要があるだろう。

謝辞

本研究では被験者を集めるにあたって、学校法人KCP学園KCP地球市民日本語学校に協力して頂いた。また、韓国語のネイティブチェックとして朴秀娟氏と李多慧氏に協力して頂いた。ここに記して感謝申し上げる。なお、本研究は、JSPS科研費24520684（基盤研究(C)）の助成を受けたものである。もちろん、誤植等すべての責任は筆者にある。

注

1. 統語的複合動詞はV2がさらに3つに下位分類される（影山1993:143）。
 - (i) 他動詞型補文構造のみ：「終える」「忘れる」「飽きる」等
 - (ii) 非対格型補文構造のみ：「出す」「かける」等
 - (iii) 両型が可能：「始める」「終わる」「続ける」等
- (i) はコントロール動詞であるため、V1を構成するVPの指定部にPROがあり、

主語は V2 の指定部にあると仮定される。(ii) は繰り上げ構文で現れる動詞であるため、VP1 の指定部に主語があり、VP2 の指定部は空である。(iii) は (i) の構造も (ii) の構造も許されるものである。

2. 本稿では統語的複合動詞に焦点を置き議論する。日本語学習者にとっては語彙的複合動詞の習得も難しい項目の 1 つである。語彙的複合動詞に関する日本語学習者の習得研究については永井 (1996)、谷内・小森 (2009)、小森 (2015) 等を参照されたい。
3. なお、本稿における例文中の略記は以下の通りである (Rel = Relative, NMNZ = Nominalizer, Nom = Nominative, Acc = Accusative, Decl = Declarative)。
4. 日本語と同じように韓国語の語彙的複合動詞に統語操作を適用しようとすると容認されない。(ia) は (3a) に、(ib) は (3b) に対応している。

- (i) a. *kuleykey ha-ki nayli(-ta)
 so do-suffix come.down(-Decl)
- b. *kuleykey ha-ki nol(-ta)
 so do-suffix hang.out(-Decl)

5. 日本語と韓国語の対照研究の先駆けとして生越 (1983) がある。生越氏は生産性の観点から複合動詞の後項を 2 つに分類している。1 つは、韓国語で副詞ないし副詞的語句に対応するもの (e.g., -終わる、-終わる、-続ける等) であり、もう 1 つは、別の表現で表されるもの (e.g., -かける、-だす、-始める、-忘れる、-飽きる等) である。
6. 査読者の 1 人から接尾辞 *-ki* は日本語の連用形と変わらないのではないかとの指摘を受けた。しかし、接尾辞 *-ki* は日本語の連用形とは異なる。*-ki* は名詞形成接尾辞としてだけでなく動名詞形成接尾辞としても機能する。それに対して日本語の連用形は名詞派生として機能することはある (e.g., 彼の走りは素晴らしい) が、動名詞は形成できない。詳しくは、伊藤 (2012) を参照されたい。
7. (6a) と (8a) の違いは動詞の自他である。(6a) は他動詞であるため、「を」格名詞句を補部に取りれるのに対して、(8a) は自動詞であるため、それができない。
8. 金田一 (1950) は、「ている」の共起関係および「ている」が付いた際の意味に着目して、日本語の動詞を 4 つに大別している。具体的には、(i) 状態動詞、(ii) 継続動詞、(iii) 瞬間動詞、(iv) 第四種の動詞である。(i) は、「ある」のように、状態を表す動詞である。(ii) は、「走る」のように動作の進行を表す動詞である。(iii) は、「死ぬ」のように、結果の状態を表す動詞である。(iv) は、「そびえる」のように、辞書形では通常使われず「ている」を付けて使う動詞である。
9. Bardovi-Harlig (2000) は、時制と相の習得順序を調査した結果、単純過去時制→過去進行相→現在完了相→過去完了相という習得順序があると主張している。時制と相

の習得順序を調査した Bardovi-Harlig (2000) による研究でも、進行相が完了相よりも早く習得している点で、Bardovi-Harlig (2000) も関係しているかもしれない。

10. 「ている」では表せないアスペクトは複合動詞によって表現される。例えば、「続ける／続く」が表すのは、動作ないし出来事が終結しないことを表すのに対して、「ている」は動作ないし出来事がある時点で行われている、ないし、起こっていることを表す。したがって、時の流れのある一点を指す表現と共起させると違いがはっきりする。例えば、「太郎の入社式の日、雨が {＊降り続いた／降っていた}」である。また、完了相を表す「ている」と「終わる／終える」の違いは、V1 の違いである。脚注 8 に示した金田一 (1950) による分類にあるように、「ている」が完了相として機能するのは瞬間動詞のときのみである。それに対して、「終わる／終える」は継続動詞のときに使われる。
11. 上位群の日本語学習期間が下位群のそれよりも短いのは、「日本語を学習し始めたのは何歳の時ですか」という質問に対して、下位群の 26 歳の被験者が 3 歳と回答したり 25 歳の被験者が 5 歳と回答したりしていたためである。彼らは「どこで学びましたか」という質問に「うち」や「家」と回答していたことから幼少期から日本語に触れる機会があったと推測される。
12. 時制は調査対象にしていないため、過去形か非過去形かは採点の対象にしていない。
13. V1 を「食べる」に統一した理由は、玉岡・初 (2013) によって、V1 の難易度が複合動詞の習得に最も影響を及ぼしていると指摘されているからである。玉岡・初 (2013) が研究対象にしたのは語彙的複合動詞であるが、複合動詞の習得研究という点では同じであると判断し援用した。なお、「食べる」は日本語能力試験 4 級で出題される動詞であるため、下位群の被験者であっても既知の動詞であると推定した。
14. 本研究では、5. に関しては「終える」「終わる」どちらを選んでも正解とした。日本語の「終わる」は「を」格を取ることが可能だからである。1 名は未記入であったため誤答とした。
15. 5. に関しては「食べ終えた」と「食べ終わった」の両方を正解と見なして集計した。
16. 主語が無生物 (雨) で V2 が起動相 (～始める) および進行相 (～続ける) の正答率が上位群と下位群ともに低いという共通点があった。一方、完了相 (～終わる) の場合には主語が「雨」であっても正答率が高かった。この結果が主語の有性性 (animacy) に起因しているのかどうかに関しては今後の研究課題である。
17. 査読者の 1 名から、統語的複合動詞を構成する V2 の自他を間違えるのは、日本語学習者にのみに当てはまり、統語的複合動詞を持つ他の言語の学習者には当てはまらないのかとのコメントを得た。しかし、この問いに回答するためにはまず日本語以外の

自然言語の中から統語的複合動詞を有する言語を探す必要があるため、回答するのが難しい。例えば、韓国語には本稿で議論しているように統語的複合動詞は迂言的に別の表現で言い換えられる。中国語に統語的複合動詞があるかどうかに関しては議論に決着がついていない。なぜなら中国語の複合動詞が連続動詞構文 (serial verb construction) である可能性がある (cf. Jiang 2017) 点で、日本語の複合動詞と質的に同じかどうか分からないからである。それ以外の複合動詞を有する言語 (e.g., トルコ語等) にも語彙的複合動詞はあっても統語的複合動詞はないと考えられている (栗林 2013)。

18. 上位群の中には、答案用紙に「ヨンヒがコンビニ弁当を食べ飽きた」における「が」に斜線を引き、その上に「は」と書き、完全に間違っていることを示す「1」を選んだ学習者が2名いた。少なくとも、2名は複合動詞に下線を引いていたにもかかわらず、「が」が「は」なのではないかと考えて容認度を判断した可能性がある。
19. 査読者の1人からなぜ表7に示した産出テストの結果では上位群と下位群で4. 雨が(降り始めた)と6. 雨が(降り終わった)における正答率は、上位群と下位群共に変わらないにもかかわらず、表8に示した文法性判断タスクでは下位群に「終える」が容認されないのかという指摘を受けた。これはテストの違いが起因していると考えられる。産出テストではV1を連用形にすること、V2の自他を適切に選択することという形態面の理解が求められているのに対して、容認度判断タスクではV1とV2の意味関係が正しいかどうかを判断させている。前者はV1とV2の意味関係が分からなくても回答できるが、後者はそれが無理である。このことから、韓国人日本語学習者が日本語の統語的複合動詞を習得する際、複合動詞を構成するV1とV2の意味関係を考慮しながら、複合動詞が容認されるかどうか判断していると考えられる。
20. 本研究では、進行相だけでなく起動相も完了相よりも容認度が高いことを明らかにした。起動相が日本語学習者の中間言語において完了相よりも容認度が高いのか、アスペクトの習得順序の中でどのように位置づけられるのかという問いに関しては今後、韓国人以外の日本語学習者を対象にして調査する必要がある。
21. 次の段階としてアスペクト動詞を日本人と同じようにVPだと再分析する段階がある可能性もあるが、その可能性が正しいかどうかに関しては今後の研究課題である。
22. V2が「続く」の複合動詞の場合のV1は非対格動詞のみであり、したがって、主語は自然現象に限られる。例えば、「雨が降り続く」「雷/音が鳴り続く」「風が吹き続いた」等である。これらはV1にくるものが限定的である点で語彙的複合動詞である。文法性判断タスクの結果は表7を参照されたい。
23. 韓国語にも「物をどこか一点に留める」の意味の「걸다 (直訳: かける)」はある。「걸

다」にも「내다 (直訳：出す)」と同様に、起動相の意味はない。にもかかわらず、日本語の「食べ出す」と「食べかける」の結果を比べると、「食べかける」の方が容認度が高かった。これがなぜなのかに関しては今後の研究課題である。可能性の1つとして考えられるのは、「出す」には表意文字である漢字「出」が含まれるのに対して「かける」はひらがなのみであることである。ただしこれは推測でしかないので、表記方法が容認度に影響を及ぼしているかどうかに関しては、今後、調査していく必要がある。

参考文献

- 一瀬陽子・木戸康人・團迫雅彦 (2015) 「韓国語を母語とする日本語学習者における統語的複合動詞の習得」『福岡大学人文論叢』47 卷, 2 号, 453-475.
- 伊藤英人 (2012) 「古代・前期中世朝鮮語における名詞化」『東京外国語大学論集』85 号, 77-104.
- 生越直樹 (1983) 「日本語複合動詞後項と朝鮮語副詞・副詞的な語句との関係」『日本語教育』52 号, 55-64.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房, 東京.
- 金田一春彦 (1950) 「國語動詞の一分類」『言語研究』15 号, 48-63.
- 栗林裕 (2013) 「V+V 型複合動詞と語形成」影山太郎 (編). 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』273-299. ひつじ書房, 東京.
- 小森由里 (2015) 「日本語教科書における複合動詞—立教大学文法教科書の分析—」『日本語教育実践研究』2 号, 55-67.
- 許夏珮 (2005) 『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版, 東京.
- 玉岡賀津雄・初相娟 (2013) 「中国人日本語学習者の語彙的複合動詞の習得に影響する要因」影山太郎 (編). 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』413-430. ひつじ書房, 東京.
- 谷内美智子・小森和子 (2009) 「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に—」『日本語教育』142 号, 113-122.
- 陳曦 (2004) 「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—『～あう』と『～こむ』の理解に基づいて—」『ことばの科学』17 号, 59-80.
- 陳曦 (2010) 「第二言語としての二種類の複合動詞の習得—コーパスによる学習者の使用実態をもとに—」『ことばの科学』23 号, 19-35.
- 塚本秀樹 (2012) 『形態論と統語論の相互作用—日本語と朝鮮語の対照言語学的研究』ひ

つじ書房, 東京.

永井鉄郎 (1996) 「日本語複合動詞の教育について」『日本語教育』88号, 140-151.

白美蘭 (2012) 「複合動詞『～出す』の習得—韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者を比較して—」第49回講座ゼミ, ms., 名古屋大学, 名古屋.

松田文子 (2002) 「日本語学習者による複合動詞『～こむ』の習得」『世界の日本語教育』12号, 43-62.

和田学 (2011) 「二つの語彙的緊密性—韓国語 (と日本語) の複合動詞—」『山口大学文学会志』61巻, 83-104.

Bardovi-Harlig, Kathleen. (2000). *Tense and aspect in second language acquisition: Form, meaning, and use*. Oxford: Blackwell.

Jarvis, Scott and Aneta Pavlenko. (2008) *Crosslinguistic influence in language and cognition*. New York, NY: Routledge.

Jiang, Yueqiu. (2017) Serial verb constructions in Mandarin Chinese. *International Journal of Linguistics* 9(5), 184-196.

Kido, Yasuhito, Masahiko, Dansako and Yoko, Isse. (2015) On the syntactic complex verbs in Japanese and Korean. *JELS* 32, 262-268.

Odlin, Terence. (1989) *Language transfer: Cross-linguistic influence in language learning*. New York: Cambridge University Press.

Saito, Mamoru. (2013) Conditions on Japanese phrase structure: From Morphology to Pragmatics. *Nanzan Linguistics* 9, 119-145.

Schachter, Jacquelyn. (1974) An error in error analysis. *Language Learning* 24, 205-214.

Selinker, Larry. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics* 10, 209-231.

Sugaya, Natsue and Yasuhiro, Shirai. (2007) The acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L2 learners of Japanese: Transfer, universals, or multiple factors? *Studies in Second Language Acquisition* 29, 1-38.

VanPatten, Bill. (1996) *Input processing and grammar instruction: Theory and research*. Norwood, NJ: Ablex.

Yoshimura, Noriko and Mineharu, Nakayama. (2009) Acquisition of two types of -s by Japanese EFL learners: The role of L1 transfer. In Yang, Y-S., Tang, S-W., Kim, C., Yoon, J-Y., Kang, Y-S., Kim, K-A., Yoo, H., Jang, Y. and Kang, H-K. (Eds.), *Current Issues in Linguistic Interfaces* 2, 253-263. Seoul, Korea: Hankook Munhwas.